

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02077

研究課題名(和文) 個々人が担う「植民地責任」 英系クリオール女性を例として

研究課題名(英文) Colonialism Revisited: in the case of creole women

研究代表者

堀内 真由美 (HORIUCHI, MAYUMI)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60449832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1950年代から本格化する英領西インドの独立運動を、クリオールと呼ばれる本国系白人が、どう捉えどう関わりどのような結果に終わったかを明らかにすることだった。研究対象の英領ドミニカ出身クリオール女性、ジーン・リース(1890-1979)とフィリス・オーフリー(1908-86)の故郷への愛憎半ばする言動を、両者による文芸作品や日記、書簡を網羅的に探究することで明らかにできた。また文化人類学研究成果を借り、彼女たちの故郷の島に対する知識を確認した結果、「故郷への理解」が必ずしも肌の色の異なる島民には評価されず、脱植民地過程で彼女たちの貢献は道半ばに終わり、忘却されていったことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英領西インドのクリオールに着目した本研究は、イギリスの植民地主義の歴史が生み出した存在を認識させ、その存在が、脱植民地過程で、本国と故郷の植民地間でいかに動揺させられたかも示した。彼女たちは、植民地支配の歴史すら忘却しつつあった本国人たちの記憶を喚起させると同時に、奴隷の子孫が同胞となりつつある脱植民地過程で、自らの差別意識と向き合い苦悩しつつ独立への道を歩んだことを明らかにした。このことは、支配体制の差異、第2次大戦での勝敗、戦後処理の違いを超え、旧宗主国に属する現代の人々が学びうる共通の過去を喚起させ、その理解と共有が個々人の担いする「植民地責任」につながるということを認識させる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to demonstrate how the Creole women born in the British West Indies, Dominica would react the decolonisation of their home island, take part in the movement, and be regarded by their fellow islanders.

I made a focus mainly on the two Creole women, such as Jean Rhys(1890-1979) and Phyllis Allfrey (1908-1986), and examined their written works very carefully. According to the examination, a blend of love and hatred to their home island was found clearly as well as their efforts to inform the people in Mother Land of a lot about the island. By using some cultural anthropological study on Dominica, these Creole women's knowledge of the island and the islanders was found to be highly accurate. Their contribution to the island, however, resulted in failure without getting their fellow islanders' appreciation.

研究分野：ジェンダー論(史)

 キーワード：脱植民地化 旧英領カリブ海諸島 西インド連邦 ポストコロニアル ジェンダー ジーン・リース  
 フィリス・オーフリー 「ブラック・フェミニズム」

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

第2次世界大戦終結から70年以上の年月が経過した現在でも、国家間、地域間における緊張や紛争が私たちの目に触れない日はない。本研究は、その背景に、支配 被支配関係とりわけ植民地主義の歴史がまだ克服されていないことがあるとの前提に立ち、国家間での折衝という次元とは別に、かつて支配した側に属する個々人が、「国民感情」や「地域感情」のもつれをほぐし、対話を促進する努力があるのではないかと考えるに至った。

### 2. 研究の目的

本研究では、そうした個々人の努力を後押しするため、ともすれば忘却され、悪くすれば改ざんまでされてしまう「支配した側」の歴史をひもとき、それをわかりやすい形で提示することを目的とした。具体的には、主に連合王国(以下、イギリスと表記)とカリブ海西インド植民地との関係史をひもとき、その研究過程で、「個々人として担うべき植民地責任」とはどのような具体的認識を持ち行動することなのかを、広く社会に発信していくこととした。

### 3. 研究の方法

研究代表者は、本研究に先立ち、2014年4月に採択された「挑戦的萌芽研究」において、英領西インド植民地の「クリオール」と呼ばれる植民地生まれのイギリス系白人の存在、とりわけクリオール女性に注目し、歴史的に作られた「支配する側」と「支配される側」との間に置かれた彼女たちの存在を通して、植民地主義の歴史を再定義する。つまり植民地主義の歴史は、植民地の政治的独立だけを持って完了することのない、意識し、学びつづけることを要求するものであるという見地である。そのことを、具体的には、英領ドミニカ出身のクリオール女性、ジーン・リース(1890-1979)とフィリス・オーフリー(1908-86)の残した小説、書簡、インタビューに加え、同時代の「人種」や「植民地政策」に関わる新聞記事、本国植民省の文書などを網羅的に考察することで明示していった。

### 4. 研究成果

#### (1)直接的成果

探究の結果、1950年代から本格化する英領西インドの独立運動を、クリオールと呼ばれる本国系白人が、どう捉えどう関わりどのような結果に終わったかが明らかになった。研究対象の英領ドミニカ出身クリオール女性の故郷への愛憎半ばする言動に加えて、文化人類学研究成果を借り、彼女たちの故郷の島に対する知識を確認した結果、故郷への「正確な理解」が必ずしも肌の色の異なる島民には評価されず、脱植民地過程で彼女たちの貢献は道半ばに終わり、忘却されていったことがわかった。つまり、「良き植民地人」は「良き島民」には必ずしもなれなかったということ、何より、奴隷として連行され、島民となった人々にとって、彼女たちの良心は、脱植民地過程における経済的政治的苦闘を支えるものとは、残念ながらならなかった。この結果は、政治的側面以外で、島民の中の分断解消など、心情的側面を含めての「真の独立状態」に関して、本国イギリスがいかに無関心だったかということも示している。

#### (2)日本における成果と意義

英領西インドのクリオールに着目した本研究は、イギリスの植民地主義の歴史が生み出した存在を認識させ、その存在が、脱植民地過程で、本国と故郷の植民地との間でいかに動揺させられたかも示した。彼女たちは、植民地支配の歴史すら忘却しつつあった本国人たちの記憶を喚起させるべく努めたと同時に、「奴隷の子孫」が社会的に平等な「同胞」となりつつある脱植民地過程で、自らの差別意識と向き合い、あるいは無自覚なことを非難され、苦悶しつつ独立への道を歩んだことを明らかにした。

このことは、支配体制の差異、第2次大戦での勝敗、戦後処理の違いを超え、旧宗主国に属する現代の人々が学びうる共通の過去を喚起させ、その理解と共有が、個々人の担いうる「植民地責任」だという認識を普及させると考えられる。

旧宗主国の1つである日本においても、支配した歴史の確認と、その歴史のなかで翻弄された人々の、今日に連なる苦闘に思いを馳せることで、1人1人の「植民地責任」を果たすための、重要な1歩を踏み出すことができることを、本研究で示せたと考える。

#### (3)当初予見しなかった成果 BCA とジャマイカ訪問

##### BCA との出会い

本研究は、当初の計画において、前回の「挑戦的萌芽研究」での海外調査先と同様に、毎年2月のドミニカ、8月のロンドン訪問を想定していた。ところが、2017年10月ハリケーン・マリアの直撃を受けたドミニカでは、公的機関も含めた建物が壊滅的な損傷を負った。毎回滞在するホテルはもちろん、国立公文書館、首都ロゾーのパブリック・ライブラリーなど、関係資料閲覧のため訪問していた場所が、再開の目途が立たないほどの被害を受けたのである。2020年2月現在、西インド大学(The University of the West Indies)ドミニカ・オープンキャンパス(出張所)でお世話になった図書室司書氏としか、連絡が取れていない状況である。おそらく、

通信も含めたインフラの再構築に多大な時間と資金がかかっているためと思われる。

2018年の2月は急遽、調査先をロンドンに変更し、ロンドン大学本部図書館と大英図書館での資料検索を行うこと、また、2019年春まで会期があったロンドン博物館での「女性参政権100周年特別展示」を、前倒しして、この機会に見学することとした。一方で、2018年は西インド植民地から労働移民がまとまって「宗主国」に来英した、汽船「ウィンドラッシュ号」ロンドン上陸から70年の周年イベントもあるだろうと期待していた。そこへ、研究代表者の勤務校のイギリス人同僚から、70年前から西インド人移民が住み始め、コミュニティができたロンドン南部のブリクストンに2014年リニューアル・オープンした、Black Cultural Archives(以下、BCAと表記)が、研究代表者の関心に最も合った訪問場所として提案された。

期待通り、BCAは、研究代表者の興味・関心を大いに喚起してくれた。西インド植民地、独立前後のアフリカ各地、それにインド亜大陸からの移民を「ブラック」と呼び、かれら「ブラック・イングリッシュ」が「ここ」にやってくるまでの奴隷貿易や植民地支配の歴史、および、かれらが「ここ」で受けてきた排除と抑圧の歴史と現在を知る上で欠かせない資料を擁するだけでなく、BCAは、それを語り合う学習の場としても機能している。多くの、主に旧英領西インド植民地をルーツに持つ、移民2、3世の人々が、曜日替わりでボランティアとして運営に関わっているのも特徴である。研究代表者は、ドミニカ出身のスタッフ数人と知り合った。かれらとの語らいも、資料と同じくらいに貴重であり、また訪問の緊張を和らげ、それを楽しいものにしてくれた。

研究代表者はBCAの資料を通して、1948年に第一陣としてやってきた、およそ500人の、そのほとんどがジャマイカからの労働移民と、それ以降、移民制限が厳格になっていく70年代はじめまで次々とやってくる「ウィンドラッシュ世代」と呼ばれる人々の生活と、かれらが受けたさまざまな差別と抑圧の「現代史」を知ることになった。また、2018年は、白人ミドルクラス女性が参政権を獲得して100周年、ウィンドラッシュ号上陸から70周年にあたる年であったのと同時に、「ウィンドラッシュの子どもたち」つまり、イギリスで生まれ育ち、学校教育を受け始めた世代の女性たちが、「ブラック女性」として1つのまとまりある全国組織を立ち上げて40年にあたる年でもあったことを知った。

#### ジャマイカ訪問へ

この全国組織、The Organisation of Women of African and Asian Descent(以下、OWAADと表記)のニューズ・レターをひもとくだけでも、彼女たちの反差別の様々な活動に触れることができた。研究代表者は、この全国組織を立ち上げた3人の「ブラック女性」の存在を知る。そのうちの1人が、研究代表者がドミニカで知己を得た「ウィンドラッシュ世代」で、2008年に故郷ドミニカに帰国してきた男性と同じように、彼女の故郷であるジャマイカに帰国したことを知り、話を聞いてみたいと思った。渡英した西インド移民でその後故郷に帰った人々、Returneeと呼ばれる帰国者たちは、これまで研究代表者が追ってきた白人クリオール女性と同じように、「本国」と故郷の(旧)植民地の島の2つの社会を知る存在だからである。

ジャマイカ訪問の機会もめぐってきた。2018年秋から参加させてもらっていた共同研究(基盤C2017-19、「カリブ海旧イギリス領諸国における植民地時代の事物の現存と歴史的記憶」、研究代表者：川分圭子、京都府立大学)から、ジャマイカ訪問を打診されたのである。そこで、まず、ジャマイカの情報を得るべく、研究代表者が会員となっている「ラテンアメリカ協会」主催の講演会「ジャマイカの魅力 投資・ビジネス機会」に参加すべく、2019年7月に上京し、講演会の場で、リカルド・アルコック駐日ジャマイカ大使に質問をさせていただいた。「投資・ビジネス」とは直接関係のない、「ウィンドラッシュ世代」に関して投げかけた質問に、大使は興味を持ってくださり、後日、改めて、面談の機会を設けてくださった。共同研究のメンバーと研究代表者は、同年8月、東京麻布にあるジャマイカ大使館を訪問し、我々の旧英領西インドに対する研究関心をお話しし、大使からは、はじめてのジャマイカ訪問に際し、必要な情報提供や、現地の各方面への事前連絡もして下さることになった。

同年9月、前後のカナダ乗り継ぎでの宿泊を除けば、ジャマイカの首都キングストンでの滞在は3泊しか確保できなかったが、大使が取り次いでくださり見学がかなったブルーマウンテン・コーヒープランテーションの来歴を知り、島北西部のモンテゴベイにある砂糖プランテーション遺構など、ジャマイカの英植民地時代の記憶をたどることができた。また西インド大学、ジャマイカ・モナキャンパス訪問では、歴史学科長との面談も叶った。植民地時代の歴史と脱植民地過程の現代史を、必ずしも関心のあるわけではない若い西インド人学生に教えるのに工夫の要ることなど、歴史教育の現実についても貴重なお話しを伺えた。

#### (4)今後の展望

従来の資料調査訪問先の1つであるドミニカの完全な復興を待って、引き続き、クリオール

女性たちの脱植民地経験をさらに追っていくとともに、予想外の訪問機会に恵まれたジャマイカへの調査にも時間を割きたい。というのも、1 つには、ジャマイカには西インド大学を構成する4つのキャンパスのうちの1つ、モナキャンパスがあり、図書館や資料館は、植民地時代の歴史だけでなく独立前後の「移民の歴史」への理解と周知に力を入れているからである。もう1つ、ジャマイカへの訪問機会を増やしたい理由として、研究代表者が2020年2月のジャマイカ単独訪問の際、2年越しに面会の希望が叶った、OWAAD 創設者の1人で、1992年にジャマイカに帰国し、モナキャンパスで昨年まで教鞭をとられていた Beverley Bryan 氏との、さらなる交流を維持したいことがある。

2月の面会時には、90分にわたる研究代表者によるインタビューに答えていただき、ジャマイカでの幼少期の記憶、両親が彼女をイギリスに呼び寄せた背景、イギリスの学校教育で受けた差別的待遇、基礎学校教員として「ブラックの子どもたち」を教えた経験、「ブラックとしての自意識」が高まった70年代のイギリス社会情勢、その延長としてあった「ブラック女性」としての政治的活動、そして、ジャマイカへの帰郷と、自身の半生を、ユーモアも交えて語ってくださった。

研究代表者はすでに Bryan 氏の許可を得て、この時の録音内容をすべて文字に起こし終えた。もちろん、この草稿には、研究代表者のまだ十分理解できていない出来事や社会情勢、地名や固有名詞も含まれていることから、氏との電子メールでのやりとりなどを通して、氏の半生を理解し、そしてそのことと、当時のイギリス白人社会に置かれた「ウィンドラッシュの娘たち」の状況を関連づけて、明らかにしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 堀内 真由美	4. 巻 第68輯
2. 論文標題 島民になれなかった「植民者」 フィリス・オーフリー「正確なドミニカ理解」の果て	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告	6. 最初と最後の頁 15～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀内 真由美	4. 巻 第67輯
2. 論文標題 郷愁と確執と、クリオール女性の描く「故郷」 ジーン・リースとフィリス・オーフリーのドミニカ島	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告	6. 最初と最後の頁 11～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀内 真由美	4. 巻 第38号
2. 論文標題 クリオール女性の帰郷 英領西インド諸島ドミニカとフィリス・オーフリー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 女性学年報	6. 最初と最後の頁 27～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堀内 真由美	4. 巻 第7号
2. 論文標題 OWAADと「ウィンドラッシュの娘たち」 旧宗主国における移民女性運動「史」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6. 最初と最後の頁 82～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀内 真由美
2. 発表標題 クリオール女性の植民地から「本国」への移動
3. 学会等名 大阪大学比較文学会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀内 真由美
2. 発表標題 脱植民地過程への忘却 ドミニカ島から英連邦ドミニカに至る道のりを記憶するために
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会小シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----